

飛鳥期「天皇陵」の比定をめぐる一試論

－現状整理と舒明初葬陵－

高橋照彦

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

飛鳥期「天皇陵」の比定をめぐる一試論

－現状整理と舒明初葬陵－

高橋照彦

1. はじめに

後期・終末期古墳のうち、大王墳あるいは天皇陵(便宜的に「王陵」と一括する)の比定は、考古学による歴史像の解明の軸として無視することができない。そのため、筆者は文献史料を検証しつつ、いわば歴史考古学的な立場でいくつかの考察を加えてきた。

筆者のこれまでの主な結論は、欽明陵が奈良県橿原市の五条野丸山(見瀬丸山)古墳、敏達陵が大阪府太子町の太子西山古墳、そして敏達の未完陵あるいは初葬陵が奈良県明日香村の平田梅山古墳(宮内庁治定の「欽明陵」)であり、王陵ではないが、同時期の蘇我稲目の墓は明日香村の都塚古墳が穏当であると述べてきた^(註1)。いまだ異論も残されていると思うが、筆者としては可能な限りの議論を尽くしたと考えているので、本稿ではその比定を前提にして、敏達より後の飛鳥時代を中心とする王陵を主な対象とする。

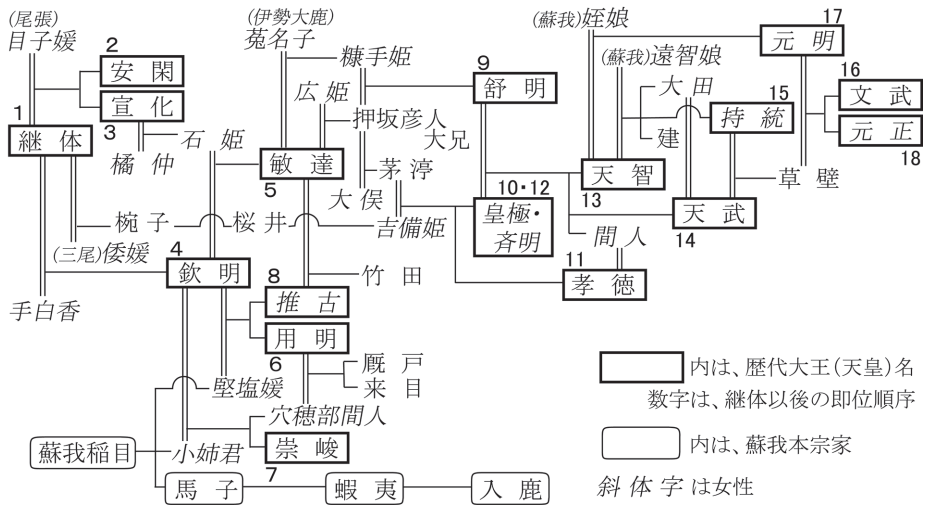
2. 用明陵～文武陵の比定とその論拠

王陵比定の膨大な研究史は他書に譲り^(註2)、できる限り王陵の所在地を絞り込み、その推論の根拠について筆者なりに要所を示したい。以下、各王陵を順にみていく(図1)。

用明陵 用明陵は、『古事記』では「在石寸掖上、後遷科長中陵」とあり、石寸(いはれ=磐余)で埋葬され、科長(しなが=磯長)に改葬されたことがわかる。『日本書紀』には用明2(587)年4月癸丑(9日)に用明が崩御し、同年7月甲午(21日)に「磐余池上陵」に葬られたと記し、推古元(593)年9月には「河内磯長陵」への改葬記事もみえる。

また、『延喜式』諸陵寮では用明陵が「河内磯長原陵」とあり、用明陵の前行に記された敏達陵は「河内磯長中尾陵」となっている。ただし、『上宮聖徳法王帝説』では用明(池辺天皇)陵は「川内志奈我中尾陵」である。しかも、敏達が合葬された母の石姫の墓が『延喜式』では「磯長原墓」とあり、敏達の陵名「河内磯長中尾陵」と齟齬をきたしている。明らかに『延喜式』の用明陵と敏達陵の名称が入れ替わったと考えざるをえず、本来は敏達陵が「河内磯長原陵」、用明陵が「河内磯長中尾陵」とみるべきである。

用明陵としては、宮内庁により治定されている太子町の春日向山古墳が有力であろう。



この古墳は、63m×60mほどの方墳で、外堤の一边は100m程度である。周濠を全周させる点で、それ以前の王陵を継承し、磯長の大型方墳の中で最も古い様相である。用明は推古元(593)年に磯長に改葬されたが、時期的にも近い推古11(603)年2月丙子(4日)に没した用明の子である来目皇子は、後に「河内埴生山岡上」に埋葬される。来目皇子墓は、その地域で該当する古墳を求めれば、大阪府羽曳野市の塚穴古墳と考えざるをえない。塚穴古墳は一边約50mの方墳で、周濠がめぐり、その外堤は100mほどの規模となる。それに近い構造の春日向山古墳は、磯長の古墳の中で用明陵に最も適切である。また、当古墳は磯長谷の中央部に張り出す尾根上に立地し、「磯長中尾陵」にもふさわしい。

一方、用明の初葬陵は磐余池上陵とされ、磐余池は桜井市池ノ内付近と推測されているが、現状ではその周辺に当該期の有力古墳が確認されておらず、絞り込みが難しい^(注3)。

崇峻陵 崇峻陵は『古事記』では「在倉梯岡上也」と記す。『日本書紀』には崇峻5(592)年11月乙巳(3日)の殺害後、その日のうちに「倉梯岡陵」に葬られたとされる。『上宮聖徳法王帝説』には「陵倉橋岡在也」とあり、『延喜式』も「倉梯岡陵」である^(注4)。

崇峻陵は、以前から奈良県桜井市倉橋の赤坂天王山古墳(1号墳)が候補とされている。赤坂天王山古墳は、6世紀末頃の大型横穴式石室や家形石棺を有し、一边が46mほどの方墳である。当古墳は当該地域で最大の方墳であり、崇峻陵の有力比定地として問題ない^(注5)。春日向山古墳より小型で周濠を持たない点や群集する古墳の中に立地する点は、殺害されたという特殊事情と連関するのかもしれない^(注6)。

推古陵 推古陵は『古事記』に「在大野岡上、後遷科長大陵也」とあり、飛鳥近くの

大野岡が初葬地であって、用明と同様に磯長に改葬されたことになる。『日本書紀』では推古36(628)年3月癸丑(7日)に推古が崩御し、その遺詔を受けて同年9月壬申(24日)条に「葬竹田皇子陵」とあって、実子である竹田皇子の墓に合葬されたことがわかる。『日本書紀』には改葬記事が採録されていないが、『延喜式』は「磯長山田陵」と記し、後に磯長に改葬されたとみて間違いない。『上宮聖徳法王帝説』には「陵大野岡也。或云、川内志奈我山田寸(村)」とあって改葬が不明確な記述にはなっているものの、『古事記』の大野岡や『延喜式』の磯長山田も確からしいことが窺える。

推古の初葬陵は、異論もなくはないが^(註7)、築造地や年代、合葬にふさわしい二つの石室の構造からも橿原市の植山古墳が適切である。当古墳は40m×27m程度の東西に長い長方形墳で、後まで柵列で保護されることも王陵にふさわしい。6世紀末頃に最初に作られた東石室に竹田皇子、西石室に推古36(628)年に崩じた推古が埋葬されたことになろう。

改葬後の推古陵としては、推古陵に治定されている太子町の山田高塚古墳が有力である。当古墳は63m×56mほどの長方形墳で、東西に2つの石室を設けている。初葬とみられる植山古墳より規模が大きく、墳形や双室構造は共通しており、改葬地に適する。

ただ、推古陵の他の候補として、推古陵の伝承もある二子塚古墳、磯長でも最大級の方墳である葉室塚(越前塚)古墳なども挙げられなくはない。このうち二子塚古墳は69m×35mほどの独特の双方墳と復元されてお^(註9)り、改葬されたにしては墳丘規模が大きくなく、石棺の年代なども7世紀中葉に下り、推古陵にはふさわしくない。一方の葉室塚古墳は75m×55m程度の長方形墳^(註10)である。推古陵が「磯長大陵」と呼ばれていたことを勘案すれば、より規模の大きな葉室塚が推古陵だという仮説も十分に検討に値する。しかし、山田高塚古墳は立地的に丘陵頂部に築いている点や近接する古墳がなく独立している点などが、用明陵とみられる春日山古墳と類似するのに対して、葉室塚では様相を異にしている。また、山田の所在地名からも山田高塚を推古陵とみるのが穏当だろう。

舒明陵 舒明は『日本書紀』によれば、舒明13(641)年冬10月丁酉(9日)に崩御し、皇極元(642)年12月壬寅(21日)に「滑谷岡」(なめはざま(なめだに)のをか)に葬られ、皇極2(643)年9月壬午(6日)には、「押坂陵」に改葬された。『延喜式』諸陵寮では、「押坂内陵」と呼ばれており、そこが最終的な改葬地であったことを裏付ける。

舒明の改葬陵は、他に候補がないため、奈良県桜井市忍阪にある段ノ塚古墳(現舒明陵)とみる説にほぼ異論がない。墳形は八角形の正面の角を面取り状として、九角形状に復元されるのが一般的で、対辺長は42m程度である。葺石はいわゆる榛原石(室生安山岩)の板石を急角度で積み上げ、その多角形の墳丘の前面には台形状に広がる3段の壇状の施設が付く。その最下壇の前面幅は約105mである。以前とは異なる新たな王陵構造である。

舒明初葬地の問題は後で検討し、次代の皇極は重祚したので斉明陵の項目でみていく。

孝徳陵 孝徳は『日本書紀』では、白雉5(654)年10月壬子(10日)に崩御し、12月己酉(8日)に「大坂磯長陵」に葬られた。『延喜式』諸陵寮も「大坂磯長陵」である。

宮内庁により孝徳陵に治定されているのは太子町の山田上ノ山古墳であるが、古墳の詳細は不明である。その古墳以外に太平塚古墳^{おひらづか}、叡福寺北古墳なども候補に挙げられている^(注12)。山田上ノ山古墳や太平塚古墳は径30mほど、叡福寺北古墳は径約50mの円墳(あるいは八角墳)とされる。孝徳陵は、飛鳥時代で最も絞り込みが困難な王陵である。本稿では紙数の関係で多様な議論を詳細に検討することがかなわないため、別稿に譲りたい^(注13)。

斉明陵 斉明は『日本書紀』によれば、斉明7(661)年7月丁巳(24日)に崩御し、間を置いて天智6(667)年2月戊午(27日)条に「合葬天豊財重日足姫天皇^{あめとよたからいかしひたらしひめ}と間人皇女^{はしひと}於小市岡上御陵^{をちのをかのへ}。是日、以皇孫大田皇女葬於陵前之墓。」とある。つまり、斉明天皇とその娘で、中大兄(天智)の妹、孝徳の皇后であった間人皇女を「小市岡上陵」に合葬し、その陵の前の墓には、天智の娘、斉明からすれば孫娘で、大海人皇子の妃でもあった大田皇女を葬ったことになる。このうち間人皇女については、天智4(665)年2月丁酉(25日)条に「間人大后薨」とあり、先の記事の2年前に没している。『延喜式』諸陵寮では斉明陵が「越智岡上陵」とあり、『日本書紀』の記事と異なる。

また、斉明の崩御に先立って、斉明4(658)年5月条には斉明の孫で中大兄の子である建王(皇子)が8歳で没して「今城谷上起殯而収」、つまり今城谷の上で殯が営まれているが、斉明は「万歳千秋之後、要合葬於朕陵」、つまり斉明の陵への建王の合葬を詔している。このほかにも、時代は下って『続日本紀』文武3(699)年10月甲午(13日)条に、罪人の赦免の詔が出され、「為欲营造越智山科二山陵也」とあって、山陵のうち越智すなわち斉明陵と、山科すなわち天智陵の营造が文武朝になされたことが記されている。

斉明陵は、奈良県明日香村の牽牛子塚古墳が有力視されている。まず、牽牛子塚古墳は越に位置しており「越智岡上」の陵名と矛盾がない。この古墳は、発掘調査によって対辺約22mの八角形墳と判明し、この時期の王陵の平面形態にふさわしい。また、2つの棺を納める特殊な石槨構造が知られていたが、発掘調査によって近接して横口式石槨墳である越塚御門古墳^(注14)も発見された。斉明と間人皇女との合葬が双室構造の石槨と対応し、陵前の大田皇女の埋葬も越塚御門古墳と一致し、牽牛子塚古墳は斉明陵と考えざるをえない。

問題は文武3年の营造との関係で、牽牛子塚古墳をその際の築造とみる見解も根強い。ただ、牽牛子塚古墳の墳丘を切り込む形で越塚御門古墳を築いている。越塚御門古墳の横口式石槨は多様な編年案があるものの、7世紀中頃、第3四半期とせざるをえないので^(注15)、文武期は牽牛子塚古墳の部分的な修築がなされたのであろう。後述の野口王墓古墳にみら

れるような墳丘裾周りの石敷きや墳丘を覆う貼石などが主な改修内容であろうか。

なお、現在の宮内庁が治定する斉明陵は、車木ケンノウ(車木天皇山)^(註16)古墳であるが、その実態は不明で、王陵として積極的に肯定する材料がない。その一方で、斉明は建王との合葬を望み、埋葬までに期間が空くこともあって、牽牛子塚古墳以前に別の初葬地があったかどうかには議論がある。この点も多様な説があるので、詳細は別稿に譲りたい。^(註17)

天智陵 天智は『日本書紀』には天智10(671)年12月乙丑(3日)に近江での崩御を伝えるが、埋葬の記事はみえない。ただ、天武元(672)年5月是月条に美濃・尾張の両「国司」に「山陵を造らんがために人夫をあらかじめ差し定めよ」との命で軍兵を集めているという記事が載る。『延喜式』諸陵寮では天智陵が「山科陵」とあり、『万葉集』155番の額田王による挽歌でも題詞に「山科御陵」がみえ、歌にも「御陵奉仕流(みはかつかふる)山科乃鏡山」とある。また前掲のように、『続日本紀』には文武3(699)年10月甲午(13日)の記事に「越智」とともに「山科」の山陵の营造記事がみえる。

天智陵としては、他に適する古墳もなく、京都市山科区御陵の御廟野古墳であることが確実視されている。この古墳は一辺46mの方形壇に、対辺長42mほどの八角墳が載るような形状であり、当該期の王陵に一般的な八角形墳で、遺構としても矛盾はない。文武期の营造の実態に関しては、検討すべき点が残るが、牽牛子塚古墳と同様だろうか。

天武・持統合葬陵 天武は『日本書紀』によれば朱鳥元(686)年9月丙午(9日)に崩御し、殯宮が南庭に設けられ、持統元(687)年10月壬子(22日)には「始築大内陵」、持統2年11月乙丑(11日)に「葬于大内陵」とある。また、持統は『続日本紀』をみれば、大宝2(703)年12月甲寅(22日)に崩御し、大宝3年12月癸酉(17日)に「火葬於飛鳥岡」、同月壬午(26日)に「合葬於大内山陵」と記されている。『延喜式』諸陵寮では、天武が「檜隈大内陵」とされ、持統は次行に「同大内陵」と記されている。

天武・持統合葬陵は、現在治定されている奈良県明日香村の野口王墓古墳とみて異論がない。調査により八角形墳であることも判明しており、^(註18)対辺長は39mほどで、墳丘は段築状となっていた。この古墳の治定は、よく知られている通り文暦2(1235)年3月20・21日に盗掘された際の記録『阿不幾乃山陵記』が明治期に発見されたことによる。

「阿不幾乃山陵」が野口王墓古墳であることは「里号野口」と記され、墳形なども記載内容と一致しており間違いはない。同山陵の盗掘は当時から広く知られており、『明月記』文暦2(1235)年4月22日条などでも天武天皇の大内山陵であったことを記す。もちろん、^(註19)13世紀前半に天武陵としての認識があったことを示すのであって、厳密には築造時からの伝承が継続していたかは定かでないが、『阿不幾乃山陵記』には石室内に朱塗りの木棺と金銅製の桶が納められていて、前者が天武、後者が持統の火葬蔵骨器と推測されるところ

であって、内容的にも天武・持統の合葬陵とみて非常に整合的である。八角墳の墳形や築造地も含めて、天武・持統陵とみて矛盾するところはないだろう。^(注20)

文武陵 文武は『続日本紀』によれば慶雲4(707)年6月辛巳(15日)に崩御し、11月丙午(12日)に「火葬於飛鳥岡」、同月甲寅(20日)に「奉葬於檜隈安古山陵」とある。『延喜式』にも「檜隈安古岡上陵」と記されている。

文武陵としては、野口王墓の南西約500mに位置する中尾山古墳が有力である。中尾山古墳は八角形墳で、対辺長が30m程度である。小型の石槨を有することから蔵骨器を納めるのにふさわしく、火葬された文武の陵として適切である。

なお、現在文武陵として治定されている栗原塚穴古墳は特に情報がなく、積極的に王陵とする根拠がない。また、近世に文武陵とされていた高松塚古墳も発掘により漆塗木棺が納められ火葬ではないことが判明しており、文武陵に適さないことが明らかである。

以上、周知の事実あるいは定説の繰り返しばかりになったかもしれないが、飛鳥時代頃の王陵について文献史料と考古資料の双方をもとに比定しうる有力墳を再確認した。以下では、未解決の王陵のうち舒明初葬陵を取り上げ、若干の検討を加える。

3. 舒明初葬陵の所在地推定

舒明の初葬地である「滑谷岡」について、宝暦12(1762)年刊の『日本書紀通證』では、「寺嶋氏曰高市郡冬野村」(現在の明日香村)と記す。また、良助親王墓の北方の字「テンノ」を天皇の意味と解して、陵の跡地ともみなされていた。^(注21)ただ、山深い谷の北斜面で当該期の古墳築造の適地とは考えられない点は、既に指摘されているとおりでである。^(注22)

その後は特に研究の進展がなかったが、発掘調査により明日香村の小山田古墳の存在が初めて明らかになり、舒明初葬陵との説も提唱された。^(注23)小山田古墳はやや台形状を呈する方墳で、南辺では東西80mを越え、北辺で72m程度、南北も70m前後の巨大な規模を有しており、榛原石による墳丘の葺石(積石)は段ノ塚古墳と酷似する。

ただ、小山田古墳は早い段階で破壊を受けており、推古初葬の植山古墳において柵列などが維持されるのとは異なる。そのため、既に指摘のあるように、蘇我蝦夷の「大陵」とみるのが妥当であろう。^(注24)蘇我馬子墓が石舞台古墳とすれば、その邸宅の近くに墓が造られていたことになり、甘檜丘の蝦夷の邸宅に近接する小山田古墳の立地も首肯される。

そうなると、舒明初葬地を小山田古墳以外に求めざるをえなくなるが、岸本直文氏や小澤毅氏が明日香村の岩屋山古墳に比定する説を出しており、^(注25)結論から言えば筆者も同意見である。ただ、岩屋山古墳は方形壇に八角形墳が載る形を復元する考えもあるものの、^(注26)墳丘上部の形状は現状では不明と言わざるをえない。方形壇は一辺が45mほどで、墳丘上部

には石材表面を平滑に仕上げた横穴式石室が築かれ、岩屋山式の標式例として知られる。

上記の岸本説は、平田梅山古墳を敏達陵とみる筆者説に基づき、その周辺に敏達系統の王族の葬地が広がるとみる点が根拠で、紙数の関係もあって詳細な議論はされていない。そこで研究史も振り返ると、岩屋山古墳に対してはこれまでから斉明の初葬陵とみる説が出されている^(注27)。石室の年代は斉明陵とみるにはやや古いと考えるが、その点は見解が分かれるため横に置くとしても、牽牛子塚古墳が斉明陵としてほぼ疑いがなくなった現時点では、斉明の初葬とするには岩屋山古墳の立地と規模が問題になろう。

まず、用明陵や推古陵、舒明陵をみれば、改葬前後で場所が大きく移動しており、また推古陵でみれば初葬時より大きな古墳に改葬されている。岩屋山古墳を初葬として、牽牛子塚古墳を改葬とすると、かなり近接する位置関係にあり、改葬する必然性が見出しにくい。しかも、岩屋山古墳で既に大型の横穴式石室を構築しており、墳丘規模でも牽牛子塚古墳より大型なので、岩屋山から牽牛子塚への改葬は、にわかには首肯しがたい。

また、斉明の場合は詔において「憂恤万民之故、不起石槨之役」、つまり万民を思いやるために墳墓造営の労役を起さないと願っていたことから、岩屋山式ともされるような労力を要する大型の横穴式石室を初葬時に採用していたことは想定しにくい。斉明陵以前に岩屋山のような石室が王陵で採用していたならば、詔とも辻褃が合う。しかも、推古陵とみられる植山古墳や斉明陵とみられる牽牛子塚古墳などをみれば、大王と皇子・王女は別の室を設けており、建王と斉明が当初から同じ石室内に埋葬された可能性も低い。

このような諸側面からみて、岩屋山古墳は斉明初葬陵とは考えにくくなる。そうすると、飛鳥でも随一の精美な石室である岩屋山古墳は、紀路(巨勢路)の南北道路を挟んで平田梅山古墳と近接して築造されたことから、その被葬者には平田梅山古墳、すなわち敏達と関係を有する非常に有力な人物を想定するのが自然であろう。陵墓の所在地が不明な人物には、敏達の孫として王位に就いた舒明が想起され、他に適任者はみつからない。

また、舒明に先立つ推古初葬陵と比較すると、推古の宮があった小墾田から植山古墳は西方やや南寄り1.5km程度と推測されるが、岩屋山古墳も舒明の宮であった飛鳥岡本宮から西方やや南寄りに2km程度であり、類似した位置関係が選択されたものと評価できる^(注28)。推古初葬陵の場合、父親である欽明が母堅塩媛と合葬された檜隈坂合陵、五条野丸山古墳と近接地であったが、敏達の孫とは言うものの舒明の陵の占地として平田梅山に近接するのも先例の踏襲と言える。そして、最終的には岩屋山古墳に隣接する位置に牽牛子塚古墳が築かれるというのも、舒明・斉明の夫婦関係にある王陵には非常にふさわしい立地を示している。さらには、岩屋山古墳は石室が開口していたこととも関係するだろうが、床面での調査でも遺物がほぼ出土しなかったのも、改葬の結果とすれば整合的である。

ほかに注目すべきは、平田梅山古墳を挟んで岩屋山と反対に東に位置するカナヅカ古墳である。一辺50mほどの大型方墳で、岩屋山式の横穴式石室とみられる。この古墳は『延喜式』諸陵寮において、平田梅山古墳とみられる檜隈陵の域内と記される「檜隈墓」にふさわしいため、被葬者は皇極(斉明)の母である吉備姫王で、敏達の孫である茅渟王の妃に当たる^(注29)。吉備姫王は、『日本書紀』によれば、皇極2(643)年9月丁亥(11日)に没し、乙未(19日)に「檀弓岡」に葬られている。岩屋山式石室がカナヅカ古墳に採用されているのも、岩屋山古墳と築造時期が近く、敏達や皇極との関係を有する被葬者どうしであるとすれば納得されよう。皇極2(643)年9月壬午(6日)に「押坂陵」、段ノ塚古墳に舒明が改葬され、同時期に蝦夷の今来の大陵、小山田古墳も築かれようとしているなかで、皇極は舒明初葬陵をモデルにして宮の近隣に母の陵を築かせていることになる。

残念ながら、舒明初葬地という「滑谷岡」の地名そのものは岩屋山古墳周辺に残されていない。ただ、岩屋山古墳の50mほど西南に安政5(1858)年の道標が残されており、岩屋山古墳の南が明日香から西方に御所へと抜ける御所街道(越の道)に当たり、峠へと続く谷筋が通っていたものとみられる。越の周辺には「ナンバ」・「ナハテ」・「ナシタニ」などの字名もあり、あるいは「滑谷岡」の関連地名として音が残ったのかもしれない。

4. おわりに

最後に、京都府内の飛鳥時代の王陵である天智陵、御廟野古墳について触れたい。御廟野古墳は方形壇の上に八角墳が載る墳形である。八角墳は段ノ塚を継承し、とりわけ牽牛子塚由来であろう。それに対して方形壇は段ノ塚の発展形とみるのが一般的かと思うが、本稿の結果をふまえれば舒明初葬陵とみられる岩屋山古墳の下部の方形壇と関連するとみるべきではないだろうか。本稿は、王陵の構成要素を読み解き、歴史的な位置付けを考える点までを本題に含めるつもりだったが、その前提の話に終始した。機会を改めたい。

以上、用明～文武までの王陵について既往の研究の整理を試み、私見の一端を示した。未知の古墳が埋もれている可能性は残され、治定された「天皇陵」のように実態が不明なものも少なくないため、拙速すぎる議論を含んだかもしれないが、諸賢の御叱正を乞う。

(たかはし・てるひこ＝当調査研究センター理事・大阪大学大学院人文学研究科教授)

注1 近年の拙論は以下のとおり。高橋照彦2023「前方後円墳の終焉」『何が歴史を動かしたのか』第3巻〈古墳・モニュメントと歴史考古学〉雄山閣、高橋照彦2025「欽明陵・敏達陵の比定をめぐる追考－東漢坂上氏の議論を含めて－」『待兼山考古学論集Ⅳ－福永伸哉先生退任記念－』大阪大学大学院人文学研究科考古学研究室、ほか。

注2 水野正好ほか1993『「天皇陵」総覧』新人物往来社、ほか

- 注3 桜井市阿倍の谷首古墳は築造が7世紀に下がるとみるのが一般的だが、現状では用明初葬陵の候補であろう。
- 注4 森 浩一1965『古墳の発掘』中公新書 p.150・p.160ほか
- 注5 桜井市纏向学研究センター編2018『赤坂天王山古墳群の研究 測量調査報告書』（桜井市文化財協会調査研究報告第1冊）桜井市文化財協会ほか
- 注6 丹羽恵二2025「赤坂天王山1号墳と赤坂天王山古墳群との関係について（覚書）」『京都府立大学考古学論集—考古学研究室30周年記念—』（京都府立大学文化遺産叢書第34集）
- 注7 上野勝己2001「植山古墳＝推古天皇陵説と記紀の検証～植山古墳は推古天皇陵か～」『太子町立竹内街道歴史資料館館報』第7号
- 注8 奈良県橿原市教育委員会2014『史跡植山古墳』（橿原市埋蔵文化財調査報告第9冊）ほか
- 注9 太子町教育委員会2019『国指定史跡二子塚古墳発掘調査報告書（2016・2017年度）史跡内容確認調査』、太子町教育委員会2023『国指定史跡二子塚古墳発掘調査報告書Ⅱ（2019・2020・2021年度）史跡内容確認調査』ほか。
- 注10 上野勝己1984『王陵の谷・磯長谷古墳群—太子町の古墳墓』太子町立竹内街道歴史資料館ほか
- 注11 堀田啓一1971「磯長谷古墳群の形成をめぐる二、三の問題について」『ヒストリア』第57号（後に2001『日本古代の陵墓』吉川弘文館に所収）
- 注12 太平塚古墳は山本彰氏、叡福寺北古墳は今尾文昭氏が唱えている。山本彰1993「聖徳太子磯長墓考」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』1（後に2007「聖徳太子墓の検討」として『終末期古墳と横口式石槨』吉川弘文館に所収）、今尾文昭1996「聖徳太子墓への疑問 天皇陵古墳'96（1）—考古学の成果—」『東アジアの古代文化』88号ほか。
- 注13 私見では、孝徳陵が叡福寺北古墳、厩戸皇子墓が葉室塚古墳の可能性が高いと考える。
- 注14 明日香村教育委員会文化財課2013『牽牛子塚古墳発掘調査報告書—飛鳥の削り貫き式横口式石槨墳の調査—』（明日香村文化財調査報告書第10集）ほか
- 注15 重見泰2017「『今城』の創出と飛鳥の陵墓—「中尾山」出土の土器群とその性格—」『古代学研究』213号（後に「王権の正統性と飛鳥の陵墓群」として補訂の上2020『日本古代都城の形成と王権』吉川弘文館に所収）
- 注16 今尾文昭2018『天皇陵古墳を歩く』（朝日選書978）朝日新聞出版
- 注17 私見の現状の結論としては、建王と斉明の合葬（予定）墓は明日香村の鬼の俎・雪隠古墳、斉明の崩御に当たり新たに造営されたのが牽牛子塚古墳、そしてかなり突飛にみえるだろうが、越塚御門古墳はもと間人皇女墓としての造営と考えている。
- 注18 福尾正彦2013「八角墳の墳丘構造—押坂内陵・山科陵・檜隈大内陵を中心に—」『牽牛子塚古墳発掘調査報告書—飛鳥の削り貫き式横口式石槨墳の調査—』（明日香村文化財調査報告書第10集）明日香村教育委員会文化財課、土屋隆史・田中詢弥2025「天武天皇・持統天皇檜隈大内陵墳丘外形調査報告」『書陵部紀要』第76号〔陵墓篇〕。
- 注19 田中教忠1906「阿不幾乃山陵記考證」『考古界』第5編第6号などで言及。（公財）冷泉家時雨亭文庫編2018『翻刻 明月記』3（冷泉家時雨亭叢書 別巻4）朝日新聞出版ほか参照。
- 注20 野口王墓古墳が藤原京の中軸線の延長にある点が指摘されており（岸俊男1969「京域の想定

と藤原京条坊制』『藤原宮』奈良県教育委員会(後に1988「緊急調査と藤原京の復原」として『日本古代宮都の研究』岩波書店に所収)ほか)、天武・持統が造営を進めた藤原宮との計画の一致からも、野口王墓古墳を天武陵とみて矛盾がない。また、『日本書紀』欽明7年7月条に良馬の記事が載るが、そこでは今来郡からの伝達とされ、檜隈邑の川原直宮の馬が大内丘の谷を超え渡るとされ、今来と檜隈、とりわけ川原と大内が近接することをうかがわせ、野口王墓が大内陵と呼ばれたこととも矛盾はない。なお、「阿不幾」は「オーギ(あふき)」と読み、筆者は音変化などには通じないが、天武陵の「大内」が「オーチ(おおうち)」、さらに側音化構音により「チ」が「キ」や「ギ」などに変化したのかもしれない。

注21 島岡芳雄編1993『大和高市村志』

注22 柳澤一宏1993「舒明天皇陵」『天皇陵』総覧』新人物往来社

注23 前掲注16 p.272ほか

注24 塚口義信2015「小山田遺跡についての若干の憶測」『古代史の海』第80号、小澤 毅2017「小山田古墳の被葬者をめぐって」『三重大史学』第17号(後に2023『古代大和の王宮と都城』(同成社古代選書46)に所収)、重見 泰2019「滑谷岡と舒明陵」『古墳と国家形成期の諸問題』山川出版社、前園実知雄2019「甘樫丘陵の二つの大墓—小山田古墳と菖蒲池古墳」『古墳と国家形成期の諸問題』山川出版社ほか。

注25 岸本直文2013「後・終末期古墳の『治定』問題」『季刊考古学』第124号、小澤前掲注24、岸本直文2019「岩屋山古墳の墳丘と石室」『古墳と国家形成期の諸問題』山川出版社。

注26 白石太一郎1982「畿内における古墳の終末」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集(後に2000『古墳と古墳群の研究』塙書房に所収)、白石太一郎2012「牽牛子塚古墳と岩屋山古墳—考古学からみた齊明陵」『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』15(後に2018『古墳の被葬者を推理する』(中公叢書)中央公論新社に所収)、今尾文昭2005「八角墳の出現と展開」『古代を考える 終末期古墳と古代国家』吉川弘文館(後に2008「畿内における八角墳の出現と展開」として、『律令期陵墓の成立と都城』(古代日本の陵墓と古墳2)青木書店に所収)。

注27 前掲注26

注28 舒明は飛鳥宮から橿原市付近と想定される田中宮や厩坂宮に遷るが、そこからも距離としては似る。また、舒明は最終的に百済宮に遷宮し、そこで崩御しているため、崩御前後の段階で新たに押坂(内)陵の造営が開始されたのだろう。

注29 吉備姫王は『本朝皇胤紹運録』に基づいて欽明と堅塩媛の間に生まれた桜井皇子の娘とされることが多いが、吉川敏子氏や吉川真司氏の研究により、吉備姫王の父の桜井皇子は継体と倭媛の間に生まれた梶子王の皇子であり、欽明との直接的な血縁を示さないことが指摘されている。吉川敏子2013「古代氏族の系譜意識」『氏と家の古代史』塙書房、吉川真司2022「片岡四寺考証—片岡王寺・西安寺・尼寺南北廃寺—」『聖地霊場の成立についての分野横断的研究』(京都府立大学文化遺産叢書 第25集)京都府立大学文学部歴史学科。

注30 天智陵が立地として山科盆地が南に広がる山の南斜面に立地する点は、段ノ塚や牽牛子塚あるいは岩屋山などとも異なり、類似するのは叡福寺北古墳と考えている。